

夢とマグロを追いかけて

在米38年、魚の行商から始まったアメリカ起業 顛末記

永井修二

目次

はじめに……………4

第1章

100ドルから始まった

アメリカ起業……………7

- 1 北海道からの旅立ち……………8
- 2 ニューヨークの日本人……………11
- 3 ボストンで始めた“魚の行商”……………14
- 4 街の中の“フィッシュマン”……………19
- 5 一難去ってまた一難、開店しては閉店へ……………25
- 6 ボストンで唯一、日本人の魚卸し屋さん……………29

第2章

魚屋さんから水産卸し会社へ……………35

- 7 新しい社屋でのスタート……………36
- 8 カナダへの道のり……………40

新しい家族の誕生……………46

販促さまさま……………49

レストランのオーナーやシェフたちと共に……………52

“危険”と隣り合わせ……………55

犠牲になった仲間たち……………57

アメリカから飛び出す……………60

韓国、香港、中国へ……………70

ボストン・ジャンボマグロ……………74

北の果てを目指す……………81

第3章

マグロを追って駆け巡る……………87

大西洋を越えて地中海へ……………88

アメリカ、ノースカロライナ沖の

ヒラメとマグロ……………97

厳冬のマサチューセッツ州、グロスター……………103

第4章

大企業への道のり

21	超低温冷凍マグロへの挑戦	107
22	マイアミ人事と家族の引越し	119
23	予期せぬ争い	128
24	マグロを追って東南アジアへ	132

第6章

ふたたびハワイへ

31	夢は果たされるのか	193
32	苦悶の中からの一歩	203
33	今ある仕事に専念	206
34	奇怪な動き	213
35	本社期待の「新星」	216

第5章

組織の苦悩

25	ワンマン社長の登場	142
26	跳躍するマグロ事業	148
27	躍進と夢	154
28	ヨーロッパ市場進出	159

おわりに

29	嵐の中のアメリカ・リターン	184
30	年の暮れの人事発令	187

41	前を向いて生きていく	248
40	憂いと焦り	237
39	瀬戸際からの試行錯誤	232
38	グロスターへも飛び火する	230
37	そのとき、何が起きていたか	225
36	懐かしいハワイ	222
35	ふたたびハワイへ	221

はじめに

年の瀬を迎えようとしているこの時期のハワイは爽快だ。空気が澄みわたり、風もひんやりとして心地がとてもよい雨が時にはバーツと空から落ちてくるが、アツという間に雨雲が去ったかと思うと陽が差しこみ、遠くの空に虹がスツと現れる。この美しく優しい自然に恵まれたハワイで今の自分の気持ちを整理しながら、過去30余年のアメリカでの年月の記憶をたどっている。

ところで私が今ハワイにいるのは、バケーションでも仕事をリタイアしたからでもない。私の職場はここにあるからだ。一昨年までは、私がハワイに来るとは全く予想もしていなかった。当時、私はマイアミで中南米から空輸で飛んで来るマグロの取り扱いに忙しくしていた。その時は「マイアミは私の最期の仕事場」と思っていたのだった。

しかし、今は太平洋の真ん中に来ており、青い空と青い海の間で遠く流れ行く雲を見ては、ふと自分の過去を振り返ってみている。

最初にやってきた所はニューヨークであった。来たばかりの頃は、アメリカで水産関連の仕事が生涯続くとは思ってもみなかった。しかし考えてみると、私の父や祖父も、北海道の厳しい津

軽海峡の海を相手に生きて家族を支えてきたのであった。自分がアメリカで海や魚と向き合いがら家族と共に生きてきたのも、天命だったのかもしれない。

私は子供の頃からずっと貧しかった。白いご飯は食べられなくても、塩蔵、冷凍、日干しの魚だけは食卓にあった。

魚は大好きだ。大人になった今は新鮮な魚やマグロも食しながら暮らせているのだから、私は本当に幸運者である。

昨年私は還暦を過ぎた。私はこれまでに1、2年の間に一度は故郷に帰り、両親の墓参りをしてきたが、これからも続けたい。遠く津軽海峡を見つめ、打ち寄せる波音を聞きながら誰もいない浜辺を散歩していると、幼かった頃の思い出が駆け巡る。

しかし、私は父親のときも母親のときも、最期の臨終の場には居合せていないのだ。両親とも突然に亡くなっているし、私は「倒れた」という電話を受けて、急遽アメリカから飛行機で飛んだが、函館まで20時間以上かかってしまい、間に合わなかった。到着したときはすでに葬式が準備され、その最中に駆け込むという状態であった。海外に出て仕事で忙しかったとはいえ、本当に私は今は亡き両親に顔向けが出来ない。親に不憫をかけた不肖息子という思いは今も消せないでいる。

この物語は若くして渡米し、マグロを追いかけ世界を駆け回った私自身の「そのままの人生奮闘記」である。30年以上にもなるアメリカでの無我夢中の人生の道のりは、素晴らしかったことも、楽しかったこともたくさんあったが、激しく揺れる会社組織の中で、苦悶と葛藤に眠れぬ日々もあった。しかし、いつの時も妻や娘が私と共にいてくれた。そして、友がいて、神が正しく導いてくれた。

また、世界へ出かけて行って出会った人達を通して、教えられ支えられたことも数知れない。こうして知ったことは、「自分の心を大きく広くし、どんな人でも愛することのできる自分にならなければならない」と言うこと、そして、「マグロに国境はなく、海は世界と繋がっている」と言うことである。

自分の歩んできた道は、今でもまだまだ頼りないが、これからも更に精進して私の夢を追い続けていくつもりだ。それでは、これまでの自分の足跡を辿ってみる。

第1章

100ドルから始まったアメリカ起業

1 北海道からの旅立ち

・津軽海峡の海に育つ

私が育つたのは北海道、函館市の戸井町。青森、下北半島の山々を津軽海峡を挟んで霞の中に遠く見ながら海辺で遊んだり、親の仕事を手伝つたりの日々であった。夏の時期には学校を休んでは大人たちと一緒に昆布とりに海にも出た。私の3歳上の兄もそうしていた。夏が過ぎて秋も深まるころとなると、キノコやワラビ、ゼンマイを探し求めて母と共に何キロも山道を歩いた。当時は熊も侵入しては村の人々を驚かせることもあった。冬となると波が打ち寄せる凍りついた岩場で岩海苔やてんぐさ取りをしている母の傍で私は手伝っていた。また、冬の海で遭難した人達を待つ家族たちの姿を吹雪の中の浜辺に見た。

この頃のひとの生活は決して楽ではなく、家も雨漏りのある古びた家であった。しかし、両親がいて祖母がおり、4人兄妹みんな力で合わせて生きていた。私はその中で次男として育った。

・オホーツク海に魅せられて

私が小学生にもなると父が最北東端にある遠洋漁業の基地、根室市の水産物冷凍会社に出稼ぎに行くようになり、翌年には母も後を追った。やがて家族みんなが引越すことになった。

今度は国後（くなしり）島を目と鼻の先に見て根室での生活が始まる。流水で埋め尽くされる冬のオホーツク海は晴天の日の碧い海と白い流水のコントラストが美しかった。しかし、いったん天候が荒れると骨に沁みる凍てつく北風が吹き、雪も激しく舞う。中学、高校への5キロの道のりを徒歩で通学することはとても体にこたえたものだった。

しかし、若さというのは全てを刺激的で、また美しくもするものである。春には仲間達と浜辺にテントを張り、羽目を外してはギターをかき鳴らして歌を歌い、夜通し大いに人生や未来を語りあった。夏休みとなると、アルバイトでお金を貯めいずこへとふらつとヒッチハイクで飛び出していった。大雪山のふもとまで行ったり、北海道を一周したり、また東京までぶらりとやってきたこともあった。人生に悩みながらも、かけがえない青春時代であった。

・東京時代

北海道での私の学生時代は、共産主義的な思想に浸かり、自ら私服で学校へ行き学生服の廃止運動を率先して行ったり、先生や他の学生と授業をそちのけで論争をしたりした。文化祭には前衛的なオブリジェを作って“突飛で奇怪な作品”を展示してみたりした。まともに勉強しているわけでもなく、仲間たちにはチョツと風変わりな学生に見えていたのだ。